「ＣＡＴＹ」の名前は、「ＣＡｍｐｕｓ」と「ｃｉＴＹ」からの造語で、地域と大学の相互理解、交流促進を目的として生まれました。「地域との共生　社会に学ぶ」を合いことばに、高等教育機関としての教育研究の成果を、地域に発信します。また学生が取材活動を通じて、読む・書く・話すといった能力を開発していくことも意図しています。

http://www.kokugakuin-jc.ac.jp

News CATY（ニュース　キャティ）

２０１９年11月　第131号

発行／國學院大學
北海道短期大学部
滝川市文京町３－１－１
TEL0125-23-4111　FAX0125-23-5590
編集事務局長　矢口元晴

稲刈り、はさかけに汗
農作業の大変さ体感　12月に収穫感謝祭

児童教育コース2年生は10月2日、秋晴れの下、江部乙町平澤農場で稲刈り・はさかけの体験活動を行ってきました。6月の田植え、7月の田んぼの生きもの調査に続く、稲作体験学習です。田んぼがどのようになっているのか気になっていましたが、とても大きく成長し垂れるほどの稲穂となっていました。

稲刈りは専用の鎌を使って行います。普段使うことのない道具であるため戸惑う学生もいましたが、平澤さんをはじめ農家の方が使い方を優しく教えてくださったため、どの学生も最後には上手く鎌を使うことができていました。また、刈った稲をはさ木に架けるために、稲を束ねて散らばらないようにするのですが、これがなかなか難しく、慣れるまで時間がかかりました。

作業をしていると、どこからか良いにおいが流れてきました。正体はミントの葉であり、害虫から稲を守るためにあぜに植えるそうです。稲刈りを終えた田んぼには、まだ殻のついたお米が何粒か落ちていたため、落ち穂拾いをしながら試しに剥いてみました。すると中から見覚えのある玄米が出てきました。これを精米すると白米になるということで、自分の植えた苗がお米になったことを実感しました。

1時間ほど作業を行ったのですが、私たちでは田んぼの8分の1ほどしか刈ることができず、稲刈りがどれだけ大変な作業であるのかを知ることができました。これからはより一層食物に感謝をし、食していきたいと感じました。

貴重な体験をさせてくださった関係の皆様に心から感謝致します。12月には、お世話になった皆さんをご招待して収穫感謝祭を行う予定です。（幼児・児童教育学科 児童教育コース2年／渡辺圭祐）

教員採用試験に13名合格
児童教育コース　教職課程の充実図る

今年度行われた北海道教員採用2次試験の結果、本学の幼児・児童教育学科児童教育コース（小学校教諭2種免許状取得可能）から13名の合格者がでました。

児童教育コースの2年生は現在28名在籍し、1次試験では19名が合格しました。この成果が生まれるようになった要因は、3年前、教員採用試験での合格者を増やしたいという意図からカリキュラム改定を行い、採用試験対策用の授業をカリキュラムに組み込み、授業が行われるようになったためです。昨年度は2名が2次試験に合格し、徐々にその成果が出始めています。

また、国文学科と総合教養学科では、中学校教諭2種免許を取得することができ、今年は2次試験の合格者がいなかったものの、教職課程の2年生25名のうち、10名が1次試験を突破しています。昨年度は1名が2次試験に合格しました。

「教職の國學院」の名に恥じない教職課程の充実を図り、多くの学生が教壇に立てられるよう魅力あるカリキュラムになるよう改革が進んでいます。

スプリングフィールド大に短期研修
活発な図書館活動に驚き
司書の講座に生かしたい

10月13日から3週間アメリカのスプリングフィールド大学で短期研修をしてきました。今回研修に参加した私自身の一番の目的は、アメリカの図書館活動、特に図書館サービスや施設設備を見て、現在私が履修している司書の講座にその成果を役立たせたいからです。

スプリングフィールド大学、ボストン公共図書館、ニューヨーク公立図書館の3つの図書館を見学してきました。

スプリングフィールド大学の図書館は、各階ごとにディスカッションルームやプレゼンテーションルームなどといった用途別の学習ルームがあります。学生が勉強しやすいよう図書館が工夫して作られていることがわかります。

ボストン公共図書館は1851年に開館し、公立図書館の始まりとなった歴史ある図書館です。現在は新館と旧館があり、新館にはラジオ局やカフェが併設されたりしています。また世界各国のテレビドラマやアニメのDVDなどもありました。旧館は天井が高くて、趣のある閲覧室があり、多くの人が利用していました。

ニューヨーク公共図書館は設置主体が法人で民間からの寄付によって運営されている歴史ある私立図書館です。資料の種類ごとに閲覧室があり、子ども図書館も併設されていました。地域の方々と世界各国からの観光客が多く訪れ、図書館が観光スポットになっているようでした。

この3つの図書館に共通していることは、図書館活動の一つとして図書館に関わるイベントが数多く開催されていることです。毎日多くのイベントが幅広い年齢層に向けて開催されていて、図書館の魅力が発信されています。

私が司書になった時には、子どもからお年寄りまで幅広い年齢層に向けた多くのイベントを開催していきたいと思います。そして利用者の立場にたった図書館づくりをしたいと思いました。（国文学科2年／宮川咲紀）

フィールドワークが印象的
研修経験を学生生活に

10月13日から11月4日まで間、アメリカのスプリングフィールド大学（SF大学）での短期研修に参加しました。

現地で私たちはSF大学の学生たちに、滝川の冬の風物詩である紙袋ランターンを作るイベントを行いました。

英語でコミュニケーションをとりながらなので少し大変でしたが、上手にランターンを作ることができました。また、SF大学の学生たちと日本のことについてディスカッションをしましたが、彼らは私たち以上に日本のことを理解していることに驚きました。日本人である私たちは、もっともっと自分の国のことについて理解し、自ら語れるような知識を身につける必要があると感じました。

また、SF大学の授業に参加してみると今まで私が受けてきた授業とは異なり、とても新鮮味を感じました。その中で特に自然豊かなチコピー州立公園でのフィールドワークが印象に残りました。大学内での授業では先生の講義や教科書中心となってしまいますが、大学外に出ることによって、自分で経験しその事柄について自ら考えるということが重要であると思いました。

今回の研修で得た経験を活かして、残り少ない学生生活を有意義にしたいと思います。（国文学科2年／竹内彩可）

第17回作文・創作文芸コンテスト
海老沢賞の子どもら表彰

第17回作文・創作文芸コンテスト表彰式が10月26日開学学記念館で行われた。今年のテーマは作文部門（小学生・中学生対象）が「家族」または「感謝」、創作文芸部門（高校生対象）の詩は「海」または「友」、短歌は「時」または「バクバク」、俳句は「夜食」で、8月19日から8月30日までの応募期間で、小学校6校82名、中学校4校83名、高校3校62名、総数227名の応募があった。表彰式では太田信二副学長から賞状と副賞が授与された。

受賞者は次のとおりである。（敬称略）

■海老沢賞

【小学生低学年部門】
福井穂香「わたしのかぞく」（北海道滝川市立東小学校2年）

【小学生高学年部門】
庄野うらら「感謝されっぱなしのお母さん」（北海道浦臼町立浦臼小学校6年）

【中学生部門】
中村優衣「「食べ物に感謝」（北海道滝川市立明苑中学校2年）

【高校生詩部門】
工藤柊翔「僕の中の海」（北海道北見北斗高等学校2年）

【高校生短歌部門】
川口希海「短歌1首」（北海道北見北斗高等学校2年）

【高校生俳句部門】
該当者なし

■優秀賞

【小学生低学年部門】
菊池恭歌「わたしの兄ちゃん」（北海道滝川市立江部乙小学校3年）

【小学生高学年部門】
菊池諒「お母さんは大学生」（北海道滝川市立江部乙小学校5年）

【中学生部門】
西村志帆「感謝」（北海道滝川市立明苑中学校2年）、青木春菅「家族がいることのありがたさ」（沖縄県名護市立屋部中学校3年）

【高校生詩部門】
阿部ひまり「海」（北海道滝川西高等学校3年）

【高校生短歌部門】
江口友翔「短歌1首」（北海道北見北斗高等学校1年）

【高校生俳句部門】
該当者なし

■奨励賞

【小学生低学年部門】
成田彩希「家族みんなのしゅみ」（北海道赤平市立赤間小学校3年）

【小学生高学年部門】
内藤彩羽「家族に感謝」（北海道浦臼町立浦臼小学校6年）、山田唯「母について思うこと」（北海道滝川市立江部乙小学校6年）

【中学生部門】
品堀愛叶「家族」（北海道滝川市立明苑中学校3年）、新里ゆら「私の姉」（沖縄県名護市立屋部中学校1年）

【高校生詩部門】
角田響「海」（北海道滝川西高等学校3年）

【高校生短歌部門】
田村陽向「短歌1首」（北海道北見北斗高等学校1年）、工藤愛菜「短歌1首」（北海道北見北斗高等学校1年）、工藤柊翔「短歌3首」、（北海道北見北斗高等学校2年）

【高校生俳句部門】
該当者なし

○海老沢賞の作品は本学のホームページに掲載していますので、ご覧ください。

「楽しい発表会」で音楽劇を上演
卒業後も経験生かす

「楽しい発表会」の準備を6月頃から少しずつ進めました。主に音楽劇での演目選びや役割分担などでしたが、本格的に道具づくりなどの準備が始まると、日が経つごとに時間が短く感じられ、公演までに準備が間に合うのか、子どもたちが楽しんでくれるものになるのか、という不安に駆られ、いくら練習しても不安は残り続けました。

私の緊張が消えたのは、公演当日にたくさんの子ども達の姿を見た時でした。その日は次々と子ども達が学校に来て、開演時間まで絵本の読み聞かせや積木で遊んでいました。子ども達の遊んでいる姿から、今日という日を楽しみにしていてくれたというのをとても感じ取れました。

今年の音楽劇の演目は『ふくろうの染物屋』です。子どもたちにとって初めて聞く染物屋という言葉に、みんな興味津々な眼差しでした。手遊びやパネルシアターを楽しんだ後なので子供たちは少し騒いでいましたが、会場が暗くなると静かになり、みんな劇に夢中になりました。音楽に合わせてリズムをとる子、目を輝かせて見入る子、みんなの楽しんでいる姿を見ると苦労が報われるとともに、改めて保育士という仕事の大切さを感じました。

私たち2年生にとってこの「楽しい発表会」が、学生生活最後の大きな行事です。この経験を、卒業し就職してからも忘れることなく、生かしていきたいと思います。（幼児・児童教育学科 幼児保育コース2年／佐久間美有）